

ト (<http://www.poland.travel/ja/8近代産業の遺産/>) が大きな助けとなった。ここでは「見る&歩く 観光スポット」のコーナーで、近代産業の遺産を「近代産業の置き土産」として、次のように紹介している。

「つい最近まで、工場などの近代工業の痕跡は景観を損なうものと扱われてきました。けれども今日では、これら工場跡に沢山の観光客が押し寄せるようになってきました。古くから残るビール醸造所や鉱山、工場などが観光名所として大人気になっています。このような施設は国内で既に2千ヶ所を数えているのです。(途中略) 工場跡は博物館となっているだけではありません。ウッチのマヌファクトゥーラ (Manufaktura) やポズナンのスタリィ・ブロヴァル (Stary Browar)、コンスタンティン¹⁾ のスタラ・パピエルニア (Stara Papiernia) など総合商業施設へ姿を変えたものもあれば、グダンスクのアーティスト・コロニー (Kolonія Artystów)、ワルシャワのファブリカ・チュシュチヌィ (Fabryka Trzciny)、カトヴィツェのシブ・ヴィルソン (Szyb Wilson) など独創性豊かなカルチャー施設となったものもあります。是非一度訪れてみてはいかがでしょうか？」

紹介事例のうち、ウッチのマヌファクトゥーラについては、先行して2013年に調査しており^{2) 3)}、今回はその他の事例のいくつかを対象とした。

一般的に、こうした産業遺産施設の再整備としては、「屋外博物館型」「総合商業施設型」「芸術文化施設型」と、それらが合体した「複合型」がある。

一番基本的なのは、旧産業施設をそのまま保存・展示内容として屋外博物館化するものであるが、本論では新たに異なる領域の機能を導入するケースで、「総合商業施設型」「芸術文化施設型」と、両者が合体した「複合型」を取り上げる。

今回の調査では、総合商業施設型としてワルシャワ近郊コンスタンチンのスタラ・パピエルニア、複合型としてポズナンのスタリィ・ブロヴァル、芸術文化施設としてワルシャワのファブリカ・チュシュチヌィ、グダンスクのフィルハーモニー・ホール、カトヴィツェのシブ・ヴィルソンを取りあげる。

2. スタラ・パピエルニア (Stara Papiernia) : ワルシャワ近郊のコンスタンチン

名称は「旧製紙工場 (英語: Old Paper Mill)」で、一般名称がそのまま今日の総合商業施設の固有名詞となっている。地域では知らぬ者のない有名な工場であったことがわかる。

ワルシャワ都心から南南東におよそ20km、車なら30分の距離にある近郊都市、コンスタンチン=イエジオルナ (Konstancin-Jeziorna) の中心に立地する。当該施設は、合併したコンスタンチンとイエジオルナの境界近く、広域幹線道路721とヴィスワ河 (Wisła) の支流イエジオルカ川 (Jeziorka) が交わる地点にある。(写真-1)

以下、同施設のウェブサイト (<http://starapapiernia.pl/>) の記述などを参考に概要を紹介する。

(1) 沿革

マゾヴィア (Mazovia) 地方の中心部 (コンスタンチン) に建てられた最初の製紙工場は、ポーランド最古の工場のひとつである。1760年、後にポーランド最後の国王 (ポーランド・リトアニア連合国王) となったスタニスワフ・アウグスト・ポニャトフスキ (Stanisław August Poniatowski) のもとで「王立製紙工場 (Królewska Fabryka Papieru)」として建てられた。当時、政府の公式文書はすべて同工場製造の紙を使っており、歴史上有名な「4年セイム (Sejm Czteroletni)」⁴⁾ や「5月3日憲法 (Konstytucji Trzeciego Maja)」⁵⁾ の文書はここで作られた紙に書かれている。

産業革命前期の工場はもっぱら水車動力に頼っており、物流手段の確保と相俟って河川の傍らに立地した。

1830年代になると、イエジオルカ川の支流を設け水車を整備し、近代的な設備を備えた新しい建物が構築される。この水路は今日でも維持され、屋外空間の景観要素として活用されている。

1836年から、フランス人ガブリエル・プランシェ (Gabriel Planche) が工場経営の実権を握ると、連続製紙のできる、当時としては最新鋭の近代的抄紙機設備を備えた新しい建物を建て、あわせて隣のイエジオルナにポトゥリツツェ (Potuliccy) 家から、周辺の緑地を含む広



写真-1 スタラ・パピエルニアのウェブサイトより